

第二篇 山中の御生活
十三、草庵と行学

十三日 庵室あじち修復書（定遺 1410）

去いぬ文永十一年六月十七日に、この山のなかに、き（木）をうちきりて、かりそめにあじち（庵室）をつくりて候ヒしが、やうやく四年がほど、はしら（柱）くち、かきかべ（牆壁）をち候へども、なを（直）す事なくて、よる（夜）ひ（火）をとぼさねども、月のひかりにて聖しやうぎやう教をよみまいらせ、われと御経をまき（巻）まいらせ候はねども、風をのづからふきかへ（吹返）しまいらせ候ヒしが、今年ことしは十二のはしら（柱）四方よもにかふべ（頭）をな（投）げ、四方のかべは一そ（所）にたう（倒）れぬ。うだい（有待）たもちがたければ、月はす（住）め、雨はとどまれと、はげみ候ヒつるほどに、人にんぶ（夫）なくしてがくしやうども（学生共）をせめ、食なくしてゆき（雪）をもちて命いのちをたすけて候ところに、さき（前）にうえへのどの（上野殿）よりいも（芋）二駄だこれ一だはたま（珠）にもすぎ。

（建治三年冬）